

さよなら異世界、またきて明日

旅する絵筆とバックパック30

風見鶏



ファンタジア文庫

2937

contents

- 序幕**
インディゴ・カーペットの夜 005
- 第一幕**
ホライゾン・ブルーに浮かぶ駅 012
- 第二幕**
ヴァンダイク・ブラウンの蒸気工場 064
- 幕間**
ブルー・ライトも届かない 123
- 第三幕**
アイボリー・ハネムーン 139
- 幕間**
焚き火のためのスカーレット 187
- 第四幕**
遠く霞んだファンタム・グレイ 202
- 第五幕**
オリンピア・グリーンは待っていた 265
- 終幕**
オーレオリンの夜明け 290

おとがき 308

See you later,
Fantasy World.
We hope that
Tomorrow comes again.



口
絵・本文イラスト
にもし

序幕 「インディゴ・カーペットの夜」

街道の先に黒い点が見えた。近づくほどに輪郭は明瞭になって、それがトラック型の蒸気自動車だということが分かった。しばらく走ってたどり着くと、トラックの斜め後ろに車を停めた。

かすかな期待はあつたけれど、路肩に寄つた車体は真つ白な砂埃に覆われたままに傾いていた。むき出しの金属管は赤茶けて錆びついている。

しばらく、そのままフロントガラス越しに眺めていた。夕暮れに足をかけた太陽の日差しが助手席の窓から差し込んでいる。混じり気のない明るさがやけに眩しかった。

目を閉じて、唇を噛んで、頬を叩いて、外に出た。

宅配便の運送トラックみたいだな、と思つた。そんな思考にさえ懐かしさを覚えてしまう自分がいる。

ゆつくりと近づいて、すみません、と声をかけた。

耳を澄ませて待った。息を呑むような時間だった。返事はなかった。風が通り抜けた。

揺れた草のこすれ合う音が波を打つように押し寄せた。それ以外に、音はない。

運転席側に回り込んで、ドアに手をかけた。自分の呼吸の、抑えきれない荒いかすれが耳障りだった。ぎぎ、と蝶番の甲高い軋みが鳴った。

光を反射して、さらさらと輝くものが目に入った。

運転席の上には結晶が山になっている。中には誰もいない。ただ、足元に酒瓶と服が積み重なっている。

助手席には大きな旅行鞆の上に茶色の帽子があつて、三つ折りにされたクリーム色の紙を押さえていた。

このままドアを閉じたい衝動にかられた。

あるいは叫びたいのか、泣き出したいのか、自分でも捉えようのない気持ちに歯を噛みしめて、逡巡して、両手を合わせ祈ってから車内に上半身を伸ばした。身体が結晶に触れた。じやらりと、無機質な音がした。

抜き取ったクリーム色の紙を広げると、それは手描きの地図だった。

道があつて、山があつて、川がある。直線に斜めに交差するように二重線が引かれていて。四角形に窓を書き加えた絵は街の意味だろうか。

地図の一番上に、川の上流にかかる橋の絵があつて、そこに何度も丸が描かれていた。

トラックの持ち主はこの橋に向かつていたらしい。

地図を丁寧にたたんで後ろポケットに差し込んだ。

結晶の山をそこに残したまま運転席のドアを閉じた。もしかすると、このドアが開けられることは二度とないと考えると、どうにも不思議な気持ちになった。

運転席のドアに並ぶようにして荷台につながる横開きの扉がある。

掛け金式の取っ手はすっかり錆びて固まっいて、押し上げるのにずいぶん力が必要だった。けれどそれさえ外せば扉は軽く横に滑った。乗り込んで、積み上げられた木箱を開けていく。

ブリキの缶詰がぎっしりと詰まっていた。

石鹼やランタンなどの雑貨品や、酒もあった。

奥には一斗缶に入った大量の水と、魔鉱石も。どちらも蒸気自動車を動かすのに必要なものだ。

ぼくは自分の蒸気自動車——ヤカンと名付けている——に戻ると、トラックの後ろに横付けするように停車し直した。トラックの後部のドアを全開にして、ヤカンに積む物資を選んでいく。

ヤカンは箱を組み合わせて作ったような形で、曲線と言えば大きなタイヤとその泥除け、

二つのライトにボンネットの膨らみくらのもので、デザインなんて知らねえよと言わんばかりに無骨だった。

トラックと比べれば積載量は雲泥の差がある。鉄柵で作られたルーフキャリアに、水や魔鉱石などの幅を取るものを載せてはいても、濡れて困るものは車内に置くしかない。

厳しく選抜してもすぐにスペースがなくなった。トラックには文字通り、まだ山ほどの物資が残っているけれど、これがヤカンの限界だ。

トラックの扉をまた閉じて、ヤカンの運転席に乗り込む。

ハンドルを握り、片手でスロットルレバーをゆつくりと押し上げた。

ボイラーで生まれた蒸気がエンジンに流れ込み、ピストンが動き出す。

シュ、シュ、シュ、と軽快に音を鳴らしながらヤカンが動き出した。

トラックの横を通り過ぎる。スロットルを開くのに合わせて、ヤカンは速度を上げていく。

やがてサイドミラーからトラックは見えなくなって、白い砂漠の平原と、点々と残った緑と、山と空だけの景色が広がった。どこから流れてきたのか大きな雲の塊が山の上を覆って、腹の底を茜色に染めていた。

空いた手でポケットから地図を取り出し、ハンドルの上に広げた。

トラックはこの道のどこかにいたはずだ。何か目印が見つかれば、ぼくがいまどこにいるのかも分かるだろう。

地図をたたみ、助手席に放る。

ああ、誰かに会いたいな、と思った。

太陽が沈む前に道端に車を寄せ、拾い集めた枯れ枝で焚き火をした。温めただけの缶詰をふたつ食べてから、ぼくはこめかみに銃口を当てた。

ゆつくりと息を吐く。目をかたく閉じる。

人指し指に力をこめようとしても、引き金があまりに重かった。やがて手が震えだして、喉が喘ぐように息を吸った。

左手で右の手首を掴んで、ひきはがすように銃を下げる。

途端にうるさいほどの鼓動が聞こえて、額に汗が噴きだしたのがわかった。息が荒い。

水中にいたみたいに身体がうまく動かずにいた。

車のドアに背をもたれて座り込んだまま、後ろ頭をこすりつけるように仰いだ。暗色のカーペットみたいな雲ひとつない重たげな夜空に無造作に星が散らばっている。

——また、失敗した。

右手に掴んだままの無骨な鉄の塊を見下ろした。急にそれを握っていることが恐ろしく

It's time to say
goodbye, but I think
goodbyes are sad and
I'd much rather say hello.
Hello to a new adventure.



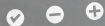
15:11

34%

< MEMO

ヤカン

魔鉱石という結晶を燃料にした、
蒸気自動の車。走る時にはシュ、
シュ、シュと機関車みたいな音が
する。
丸いハンドルに、ブレーキペダル
とスロットルレバー式のアクセルだ
けの簡単操作。ぼくは運転免許
は持っていないけど、それをチェッ
クする人もいないから大丈夫。走
るために水を常に沸かしているから
ヤカンと命名した。



感じられて放り投げると、乾いた音を立てて白い砂地に半身を埋める。焚き火のゆらめきを照り返す金属の光沢がおどましく、背筋がぶるりと震えた。

ぼくは銃から、あるいは自分の行いから視線をそらして、枯れ枝を三本取って火に投げ入れた。膝を抱えて、身体を小さくして、膝頭に額を押し付けた。

風の音もない静かな夜だった。

何もない世界にも、誰もいない世界にも飽き飽きしていた。あまりに静かで、波紋すらない孤独だけが転がっている。昔も、今も、それは肌にごびりついたように落ちないでいる。

どうしてかやって来てしまったこの異世界は、すっかりもう、減んでいた。

See you later, Fantasy
World. We hope that
Tomorrow comes again.

第一幕「ホライゾン・ブルーに浮かぶ駅」

1

トラックを見つけてから四日が経っていた。

いまだに目じるしらしいものは見つからないでいる。トラックで物資を調達できていなければ不安にかられて泣いていたかもしれない。食料と燃料の残りは心の余裕と比例している。

おまけにヤカンの調子が良くなかった。故障を抱えていると言っている。何がどう悪いのか分からないのがますます怖い。

動かなくなるならまだしも、あちこちに蒸気によって圧力がかかっているから、何かの拍子にエンジンが吹き飛ぶかもしれないという恐怖がある。スロットルレバーに手をかけるたびに嫌な汗を握るほど緊張する。

不意にまた、ガガガッと車体が尻を突き上げるように激しく揺れた。とっさにレバーを

押し上げると、ぐんつと加速して、振動は急になくなった。

「……そろそろ、マジでやばいかも」

今のは焦った。早いところどこかに腰を落着きたい。

平原の果てに何か見えないかと目をこらすけれど、相変わらず、長閑な風景が続いているばかりだった。

さつきまではあれほど背中に緊張を背負っていたのに、こうまで何もない穏やかな景色が続くと、そのうちに気を張っているのも飽きてしまう。

靴を脱いで、座席にあぐらをかいて、スマホを取り出した。画面をタッチして、聴き馴染んだ洋楽をBGMにする。こんなことになるなら音楽を山ほどダウンロードしておいたのにな、と詮無いことを考えた。

この世界に来て初めて、ほくは車というものを運転した。そうして知ったのは、運転というのとはにかく暇なものだということだ。だって、ハンドルを握る以外にもすることがないのだから。

変わらない景色と平坦な道に、穏やかな英語の歌詞。いつの間にか意識はぼうつと揺蕩っていた。

だから、それが見えたとき、しばらく夢か現実か分からなかった。砂漠で蜃気楼を眺め

るように、視界はゆらゆらと揺れていた。眠りと覚醒の波の頂点で、はっと意識が戻って、そうやくそれが現実だと気づいた。

駅だった。

平べったい長屋のような駅が水上に浮かんでいた。駅の周囲だけが、大きな水たまりのようになつて、空の青と白を反射させている。駅からは線路が二本、左右に延びていて、一台の黒い機関車が駅から半ばほど飛び出ていた。

あわてて助手席から地図を取って広げた。地図の中には駅がひとつだけ描かれている。

おそらくは、あれだろう。

どつと肩の荷が下りた。それは安堵と言つてよかつた。自分がどこにいるかも分からない状態は、こんなにも神経を疲れさせるのだと初めて知つた。

駅だ。ぼくは、駅にいる。ただそれだけのことが驚くほど嬉しい。

眠気はあつという間にふつとんだ。スロットルレバーを押し上げる。ヤカンは無言で、けれどしっかりと速度を速めて駅に向かう。

やがて水たまりに踏み込んだ。この辺りの地面が広く窪地になっているようで、タイヤの三分の一くらいが水に浸かつた。ハンドルがぐつと重くなつた。

ヤカンが進むたびに水上に波紋が広がっていく。映り込んだ青空と雲を揺らしながら、

まっすぐに駅へと進んで行く。

ついにそれが間近に見えてきて、駅の入出口のすぐ近くにヤカンを停車させた。

駅の外観のものは白かつたみたいだけれど、今ではすっかり風雨の汚れにくすんでいた。それでも汚れさえ気にしなければ、駅は変わりなく日常を担うものだった。今にも中から人が出てきそうな雰囲気があった。

駅は地面からいくらか高く造られていて、水面から浮かび上がるように階段がある。そのおかげで構内までは浸水していないらしい。

ヤカンの燃料バルブを開めて、ドアを押し開けた。

足元には空が広がっていた。靴下を脱いで靴の中に押し込んで、ズボンの裾をまくり上げた。水に足をつけると、ひんやりとした心地よさがあった。

後部座席のドアを開けて、バックパックを取って背負つた。靴を手に、ざぶざぶと水を踏み分けて階段に向かう。一段、二段と上がって、最上段に腰を下ろした。バックパックからタオルを取り出して足を拭いた。靴下と靴を履き直して、改めて構内の入出口に立つ。中には青い陰がひっそりと敷き詰められている。壁に並ぶ窓から差し込んだ光が、ぼつりぼつりと等間隔に長細い陽だまりを作っていた。

並んだベンチにも、窓口らしいカウンターにも、人の名残はなにもない。壁に掲示され

た何枚もの色あせたポスターと時刻表だけが、賑わっていたころの駅の様子をうかがわせ
た。

陰の中には鳥肌が立つような冷たい空気が溜まっている。陽だまりにさしかかるたびに、
目を細めるような光が肌を温めてくれた。

構内はそれほど広くはなかった。窓口を通り過ぎ、廊下を歩き、改札らしい柵を抜ける
と、その先が黄色く輝いていた。そこがプラットホームになっているらしい。

屋根を支えるために並んだオレンジ色の鉄柱と、背を合わせた鈍色のベンチと、平原の
鮮やかな緑と、それを飲み込みつつある白砂の丘が見えた。黒く大きな機関車。それから
さらさら、銀の糸が風にゆらめいていた。

ぼくは足を止めた。

ホームを覆う薄い屋根はいくらか崩れて穴を開けつつあるようで、ホームにはまばらに
残春の陽が落ちていく。

そのうちのひとつに女の子が立っていた。身じろぎをするたびに、陽光が銀髪に反射し
た。澄んだ青色のワンピースは空よりも軽やかで、それが余計にむき出しの腕や脚の肌の
透明さを際立たせていた。

女の子は機関車に身体を向けている。目前に置いた三脚のイーゼルには水平になったス

ケッチブックが載っていて、手に持った筆を迷いもなく動かしている。絵を描いているの
だとすぐに分かった。けれど、受け入れるには時間が要った。その光景に目を奪われてい
た。

青い陰に浮かびあがる木漏れ日のように柔らかな黄色の中で、切り取ったように明瞭な
輪郭線で女の子が立っている。非現実的なほどに、それこそ目の前の光景こそが一枚の絵
のようだった。

ふと、女の子が顔をあげた。

目の前の風景を鋭く見つめていたかと思うと、何気ない素ぶりではなく顔を向けた。目
が丸く見開かれるのがよく見えた。だからその大きな瞳が、水に反射した空よりも深い蒼
色をしていることが分かった。碧眼、というのだろうか。

ぼくたちは見つめあったままに時を止めていた。

お互いに何を言うべきか分からないでいたし、戸惑っていてもいた。なにしろ、ほとんど人
のいなくなった世界だ。こうして誰かに出会うというのは予期できるものでもない。

ただ、女の子が気づく前から、ぼくは彼女を見ていた。こっちから声をかけるべきだろ
うかと考えた。

「こんにちは」

久しぶりに、人に向けて声をだした。それは独り言とはまったく違った喉の部分を使うような感じで、ぎこちない声音で、しかも掠れていた。誤魔化すように咳払いをした。

「……こんにち、は」

と、小さな声が返ってきた。風があつたら簡単に吹き飛ばされそうで、ほんとと同じように掠れていた。

女の子は口を手で覆って、調子を確かめる猫みたいに喉を鳴らした。

会話をするには不自然に離れていたのも、ぼくは女の子に向かって歩き出した。構内から出ると、気が緩む心地よいぬくもりがあつた。三メートル離れたところで足を止めた。女の子の瞳が不安げに揺れたからだ。

「あやしい者じゃないんだ。いや、自分で言うのもおかしいけど」人生でこんなセリフを言うことがあるとは思わなかった。「ずっと道を走ってて、そうしたらこの駅を見つけて、寄ってみたら、きみがいて」

早口に並べ立てた言葉はどうにも言い訳に聞こえた。会話の仕方をすっかり忘れてしまったみたいだった。

「……そう、ですか」

あ、めっちゃ警戒されてる。警戒されてるのは分かるけど、どうすれば良いのかはさっ



ぱり分らない。

そうしてふと冷静になると、これじゃナンパだなと気づいた。見知らぬ男に声をかけられて、和気藹々と会話ができる人は少ないだろう。ましてや、こんな世の中じゃ警戒するなと言うほうが無理だ。

人恋しさから何も考えずに声をかけてしまったけれど、配慮が足りなかった。

どうしたものかと頬を掻いてみる。

もちろん、名案なんて浮かばなかった。

絵を描いているの？　なんて訊いたって、女の子も世間話がしたいとは思えない。

「……ええと、それじゃ、お邪魔しました」

愛想笑いで誤魔化して、ぼくは踵を返した。その気はなくとも、客観的に見れば人生で初めてのナンパを大失敗した男だった。

背中越しに、あの、と声をかけられて、ぼくは驚いて肩を跳ねさせてしまう。振り返ると、女の子も自分の声に驚いたように口を押さえていた。

目があって、女の子は瞳を揺らした。なにかに迷っているみたいだった。無言の時間を待っていたけれど、

「いえ、何でもない、です」

と言葉を足元に落として、またイーゼルに向かった。

会話は終わりだという意思表示を理解できないほど鈍感ではない。ぼくは冷えた青い陰の中に足を戻した。

駅の構内には他に見るべきものもなかった。窓口の奥に駅員室のような小部屋があったけれど、すっかり荒れていた。

世界が終わると知って、どれほどの人がここで駅員としての業務を続けたのだろう。鉄道に乗ってどこかに行きたいという人は増えたに違いないけれど、その運行管理をしたいという人も増えたとは思えない。

駅の出入口にまで戻ってきた。一面に沈んだ水の平原に、斜になった太陽の光が投げ掛けられている。

構内を振り返る。あの女の子は、まだここにいるつもりなのだろうか。

ずっと座席に座っているのも、ハンドルを握るのも、目印もない平原を走るのにも疲れていた。今日はこの駅でキャンプしなかった。

けれど、先にいたのはあの女の子だ。そしてぼくは警戒されてしまった。ここに居座るのも気まずく思えた。

仕方ない。駅から離れて、水気のない場所を探して、今日はそこでキャンプにしよう。

靴紐を解いて、靴下を脱いだ。ズボンの裾をまくり上げ、裸足で階段を降りる。水がひんやりと足の指にからんだ。

ヤカンの運転席のドアを開け、靴とバックバックを放り込んだ。足を拭いてシートに座り、スロットルレバーに手を伸ばして、ふと気づいた。

「あれ……？」

ボイラー内の圧力を示すメーターの針がすっかり下がっていた。駅に入るとき、ヤカンは暖機のままにしておいたはずだった。すぐに出発できるように、キャンプ地に駐車するまではそうしておくのが習慣になっていた。

おかしいな、という思いと、背筋がぞわぞわするような嫌な予感があった。並んだメーターに目を走らせた。

燃料室の圧力計は暖機状態であることを示していた。すっかり火が入っている。

改めて燃料室の開閉バルブを開いた。これで燃料室とボイラーを繋ぐパイプが開き、ボイラー内の水を沸騰させてくれるはずだ。

けれど、いくら待っても、水が沸騰するときのゴゴツという音がしない。

ボイラー内の圧力計の針も、わずかに震えるだけで、それ以上は動かない。

ほくはバルブを閉め、燃料タンクの点火スイッチも切った。そのままハンドルに突っ伏

した。

こめかみのあたりがぎゅうっと締め付けられて、顔から血の気が引いたみたいだった。

脳みそがぐるぐると回っていた。ハンドルを握りしめていないとそのまま倒れこみそうだった。

予想はできただろう、と自分に言い聞かせる。故障の予兆はあったんだから。むしろここまでよく頑張ってくれたよ。ろくに整備もしていなかったのに。

唇を噛み締めた。ドアを開け、また外に出る。飛び降りるようになって水が思い切りしぶきを上げた。ズボンがぐつしよりと水を吸ったが、気にもならなかった。

ヤカンの前に回ってボンネットを開けた。ヤカンの心臓部である。

タイヤに動力を伝えるための蒸気ピストンが組み込まれたエンジンと、蒸気そのものを生み出すボイラーが収まっている。

念入りに、端から端までチェックした。それを三度、繰り返しした。

けれど何も分からなかった。配管に亀裂が入っていると、オイルが漏れているとか、そういう目に見えて分かりやすい異常は何もない。

諦めてボンネットを閉めて、また運転席に戻った。

もう一度、始動の手順を繰り返す。

点火スイッチを入れる。これで燃料室の魔鉱石に火が入り、圧力計の針が上がる。ボイラー内の水位計をチェックする。問題なし。

祈るような気持ちで、燃料開閉バルブをゆっくりと開いた。

腕時計を見る。針が揺るぎなく動いている。一周、二周、三周……。

ボイラーの圧力計は底値からびくりとも動かなかった。完全に止まっていた。

ぼくは燃料バルブを閉じて、点火スイッチを切った。

これで、今日はおしまいだ。問題なのは、明日があるのか、ということ。

目の前には廃駅がある。あたりは水浸しだ。それ以外には、なにもなかった。

2

片手で持てる円筒形のバーナーである。

地金は金色だったみたいだけれど、使い込まれたせいですっかり鈍い色へと変わっている。中心にはおちよこのような点火口があつて、そこは熱によつて青黒い色味へと変色していた。

ぼくがこれを譲り受けたときからこんな感じだった。どれほどの間、使われているのか

見当もつかない。

スベアと呼ばれるこのバーナーは非常にシンプルな構造で、だからこそ頑丈だった。人間がすべていなくなつても、これだけは残るとあの人はよく言っていた。

本体には小さな鍵が鎖で繋がれている。それを燃料タンクと点火口を繋ぐパイプに差し込んだ。解錠するように鍵をひねつて、そこにマッチの火を近づければ、ぼつ、と火が立ち上がった。

火は断続的に消えかかったり、強くなったりする。ボツボツボツ、と不安定に鳴り続ける。タンクの中の魔鉱石に熱が入るまでは火力が不安定なのだ。

マッチの入った小さな金属の缶は、揺らせば底が見えた。マッチの数もずいぶんと少なくなっていた。どこかで補給しないと、と考えながら木箱に戻した。

ぼくは駅の階段前であぐらをかいて、ぼんやりと空を眺めた。夕焼けが空を焼いていた。浮かぶ雲の輪郭が光で縁取ったように輝いていた。広がる水面もひたすらに赤く、ぞつとするような美しさだ。

スベアはすっかり静かになって、火は安定して噴き上がっている。

車から降ろしたバックパックを探り、袋から小型のケトルを取り出して、階段下の水を汲み上げた。

地面にハンカチを広げて、革の小袋から焙煎済みのコーヒー豆を一杯分取り出した。ハンカチで包んで、薪割り用の手斧の後ろで叩いて砕いていく。何度も小刻みに繰り返し、手応えがなくなったのを見計らってハンカチを開いた。もちろん粗挽きどころじゃないけれど、この状況じゃこれが精一杯だ。

砕いた豆をケトルの中に流し込み、蓋をしてスベアに載せる。火を弱めて、あとは待つだけだった。

ケトルの口から湯気が沸きだすところに、バックパックからチタンのカップと、砂糖の入った小瓶を取り出した。

革手袋をしてケトルを取り、揺らさないようにゆつくりとカップに注いだ。茶色く色づいたお湯が流れ出て、香りばかりは立派に湧き立った。

これはフィールド・コーヒーと呼ばれるやり方で、カウボーイやらネイティブアメリカンが始めたという古い飲み方だ。ある意味、一番正統な淹れ方なわけだ。

湯気を吹いて少し冷まし、ひと口、啜った。

「につげえ……」

正統だからもつとも美味しいという理屈は、もちろん存在しない。豆を粗く砕いて放り込み、芯までとことん煮出しているのだから、そりゃ雑味や苦味やエグ味も存分に染み出

している。豆自体も見つけてから時間が経っているために、ますますひどい味わいだった。コーヒーというより、カフェインの入った泥水というべきだろうか。

カップの中に砂糖を山盛り入れて、それでようやく、我慢すれば飲めるかなという味になる。

あぐらの中にカップを抱え、苦い泥水を啜りながら、ぼけつと眼前の景色を眺める。

水に沈んだ平原の中に、オリブグリーンのヤカンの足元を通ってはるか先まで流れている。照

風が吹くと水面が波打ち、波紋はヤカンの足元を通ってはるか先まで流れていた。照り返す夕日が揺れ、静寂だけの世界が少しだけ息を吹き返したみたいだった。

ふとした足音に振り返る。

駅の構内の、濃く沈んだ影の中に、女の子が立っていた。背中にはリュックを背負い、イーゼルを抱きかかえるように上半身を反らせている。

「こんばんは」

ちよっとした気まずさを誤魔化すようにあいさつを試みる。女の子は不審を隠さず眉をひそめながらも「こんばんは」と言った。

「今日はここに泊まらせてもらおうと思って。あ、コーヒー飲む？ 不味いけど」

「……不味いものを勧めるんですか？」

「慣れたら悪くない」

「……お気持ちだけで、結構です」

女の子は通路の端——ぼくからできるだけ離れた動線を選んで階段の端に行き、荷物を置いてしゃがんだ。大きなハイカットブーツの靴紐を解いている。

髪が不思議な色に見えた。夕日に照らされている前髪は、赤みを混ぜた銀色のように澄んだ色をしている。その反対側の陰になっている場所は、銀よりもずっと明度の低い灰色だった。光の当たり方の問題だろうか。

女の子が前かがみになって、髪が横顔を遮るように流れ落ちた。それを耳にかき上げるときに、小ぶりの耳がツンと尖っているのが分かった。

「ハーフエルフが珍しいですか？」

水のようにはっきりとした声音だった。

「ごめん。不思議な髪色だなと思って。ハーフエルフっていうのは、よく知らないけど」理由はなんにせよ、女の子をじっと見ているのは不躰だった。ましてや赤の他人だ。

ぼくは視線を前に戻し、手持ち無沙汰を誤魔化すようにコーヒーを飲んだ。

ざぶざぶと水をかき分けて歩く音があつて、ぼくは横目を向けた。女の子の後ろ姿が見えた。イーゼルに結び付けられた靴が彼女の歩くたびに揺れていた。水面の上すれすれに、

ワンピースの裾がはためいている。

女の子は駅舎の端で曲がって、姿は見えなくなった。どうやら向こう側に車かなにかの移動手段を停めていたらしい。

彼女の残した波紋を目で追って、ついにそれも消えてなくなると、やけに寂しさが募った。誰かと話すという日常を思い出したあとだから、余計に肩にのし掛かった。

カップに残ったコーヒーを啜った。冷めたことで力を増した苦味と酸味とエグ味に顔を顰める。

まあ、仕方ないさ。

こんな世界で誰かと仲良くなるなんて、簡単なことじゃあるまいし。

口の中にざらりと粉っぽい感触があった。砕いたコーヒー豆だ。フィルターで漉していないから、こうしてカップの底に残るのだ。最後のひと口を投げ捨て、水を掬ってカップの中を洗い流した。

3

食は娯楽だ。

と言つても、使える食材といえは缶詰と水くらいのもので、ここ久しく新鮮な肉や魚を食べていない。茂る野草はよく見るものの、それが食べられるのか、ぼくには判断がつかない。かなり偏った食生活を送っている。

あたりはすっかり暗くなっていた。街灯のひとつもないけれど、中天にある月が辺りを柔らかに照らしてくれている。

ランタンの灯りが弱くなっていたので、小さなハンドルをぐるぐると回した。手回して発電ができるのだ。これのおかげでスマホにもわずかな充電ができる。

缶詰を並べて、ランタンの灯りで説明書きを読むが、もちろん異世界の文字だから中身ははつきりしない。それでも缶詰を開けて中身を知るという経験を繰り返してきたので、サイズや外装の雰囲気や推測する技術を身につけている。

今日はこれだと缶詰を開けると、中は赤黒いソースのからんだ肉の塊がぎっしりと詰まっていた。鼻を寄せるとツンと鼻を刺激する辛味を感じた。それでいてどこか甘い香りもした。

箸で肉をつまんで口に入れた。甘さと酸味があつた。それからすぐに、
「かつら……!」

舌を刺すような味だ。辛味は旨味にもなるが、ここまでくればただの刺激物だ。

肉は鶏肉っぽくて、この世界の缶詰ではわりと定番だ。ただ、ソースとは初対面だった。チリソースに近いようで、とにかく辛い。ぼくが楽しめる基準を明らかに超えている。

どう料理したもんかと思案しながらスベアに着火した。構内の壁に赤い揺らめきが反射している。

小さな鍋を乗せ、そこに鶏チリの缶詰をあける。空になった缶を使って水をくみ上げて、残ったソースを溶かし、そのまま鍋に加える。缶を洗うのと、味を少しばかり薄めると、一石二鳥だ。

積み重ねた缶詰から見慣れたものをふたつ取った。ひとつは豆の水煮だ。もうひとつは、キャベツの千切りの酢漬けのようなものがぎっしり詰まっている。両方とも鍋に放りこんだ。

スプーンでかき混ぜながらくつくと煮込んでいく。鍋の縁で泡が立つほどに熱くなった頃合いに、スープの味を見る。

「……まあ、うん」

予想通りとしか言えない。そりゃ、こういう味がするよね。

木箱から小型のトランクを引っ張り出した。金具を押して開く。中には小瓶や小さな筒なんかが詰まっている。この世界で集めた調味料のケースなのだ。

砂糖を取り出して、鍋に放り込む。スープの粉末を加えて、味に奥行きが出ることを期待する。刻んだハーブの葉が混ぜ込まれた塩をひとつまみ。すべて目分量だ。飲食店じゃあるまいし、食べるのも自分だけだし、料理はいつも直感と気分で行っている。これではなかなか、美味くなる。

焦げないように様子を見ながら煮詰めていく。やがてソースがどろりとしてきて、スプーンで掬えばキャベツが煮溶けつつある。息を吹きかけて、菌でこそぐように食べた。舌が悲鳴をあげるくらい熱い。

口の中に息を吸い込んで冷ますと、味が顔を見せた。どろりとした甘味があった。酸味はかすかに。スープの粉末のおかげだろう、出汁のように旨味の奥行きがある。辛味はずいぶんと薄まって、ほど良く舌を楽しませてくれる。飲み込んだあとに口の中がヒリヒリしたが、それが気持ち良いくらいだ。

「ぼくは煮込み料理の天才かもしれない」

真顔で言ってみるが、もちろん独り言である。この世界にツツコミを入れてくれる人間はもうほとんどいない。ボケは死んだのだ。

スベアの火を切ってから、円筒形の缶詰を取った。中には素朴な味わいで固くて口の中でモソモソして唾液を奪い取る凶悪なパンが入っている。これがぼくのもっぱらの主食だ

った。

その時、視界の外でじゃぶじゃぶと水を割る音が鳴った。ぼくは身を固くした。

夜は人の警戒心を強くする。背筋で糸が張りつめるように緊張感が高まった。

パンの缶詰を握りしめて、音の方をじっと見る。影が動いていた。月明かりに浮かび上がるように白い残影が揺らめいている。

ぼくはほっと息をついた。ランタンの白色灯に照らされたのは、あの絵描きの女の子だった。

彼女は片手に靴を持ったまま階段をあがってきた。やけに真剣な表情をしていた。

「あの」と彼女は切りだした。「その匂い、迷惑なんです」

「に、匂い？ ごめん、臭かった？」

女の子は首を振った。眉をひそめて、怒っているみたいに目を細くした。

「……美味しい匂いが気になって、落ち着かないんです」

きつとぼくは、きよとん、なんて表現がしっくりくる顔をしていただろう。

それから、吹き出してしまった。パンの缶詰を抱えこむようにして笑いを堪えたけれど、あまり効果はなかった。こんなに笑ったのはいつぶりだろう。

目尻に浮かんだ涙を拭くと、女の子が変わらず、不機嫌そうな顔をしていた。それは少

しばらく幼げな雰囲気だった。

ぼくが手招きをすると、女の子は野良猫のように警戒しながら、夜闇を背景に浮かび上がる白い素足でぺたぺたと近づいてきた。

それでも絶対に手が届かない場所で——何かあればすぐ逃げられる距離で立ち止まった。「晩ご飯、まだなの？」

訊くと、女の子はワンピースに羽織った上着のポケットから缶詰を取り出して見せた。

「それだけ？」

「……食料は、貴重なので」

たしかに、とぼくは頷いた。こんな水上の駅ならなおさらだ。

ランタンの灯りに照らし上げられた彼女の髪は、夕方とはまた違った、深みのある灰色をしていた。光によって色味を変えるその髪に、不思議と視線を寄せてしまう。

「よかったら一緒に食べる？　ひとりの食事には飽き飽きしてるんだ」

女の子はじっと鍋を見つめながら、「……いえ」と首を振った。お腹がぐうと鳴った。途端に、お腹を抱きかかえるように座り込んだ。

「聞かなかったことにしてください」

「いや、ばっちり聞こえたよ」

「……鳥の、鳴き声です」

「なるほど、それなら仕方ない」

納得して見せたというのに、女の子は恨めしそうな顔でぼくを睨んだ。

「じゃあ取引をしよう。その缶詰をぼくにくれるなら、この鶏と野菜のチリ煮込みを分ける。どう？」

「うっ」

難問を前にした数学者のように険しい顔だった。ただ、見つめているのは湯気をあげる鍋だ。

ぼくがこれ見よがしにスプーンで鍋をかき混ぜると、女の子の鼻がすんすんと鳴った。

「……その商談、乗ります」

厳しい決断だったらしい。女の子は重苦しく言った。ぼくはまた笑った。

「よし、こっちにおいで」

木箱から金属の皿とスプーンを探し出した。いつもは調理した鍋やフライパンからそのまま食べるので、こうして食器を使うのも、誰かと一緒に食事をするのも、同じくらい久しぶりだった。

皿によそっていると、女の子はしゃがんだまま、ゆっくりと寄ってきた。驚かせてしま

つたらずぐにでも飛び跳ねて逃げていきそうだった。

「ぼくは恵介。きみは？」

皿にスプーンを添えて差し出すと、彼女はそれを見つめた。ちらりと瞳だけを動かして、ぼくの顔をうかがった。

「……ニト、です」

手に持った缶詰を床に置き、ずいとはくの方に押しやって、ニトと名乗った女の子は皿を受け取った。その揺るぎなく頑なな態度が好ましく思える。

ニトは皿の中身を見下ろしている。ぼくはそんな彼女を見ている。ふと上げた視線とがち合って、ぼくは視線を鍋に戻した。

缶詰から取り出したパンをスライスする。缶詰の形のままに丸太のようなパンなのだ。スベアから鍋をおろし、その火でパンを炙る。

わっ、と小さな驚きの声が響いた。見ると、片手にスプーンを持ったまま、ニトが自分でも驚いたように口を押さえていた。

「口に合わなかった？」

心配になって訊いてしまう。なにしろ自分の好みに合わせた味付けだ。

ニトはぶんぶんと首を振った。自分の反応に恥じらったように、すんと表情を落ち着け

て、

「おいしくて、驚いただけ、です」

「そっか。なら良かった」

「……料理人ですか？」

「まさか。趣味だよ」

両面にきつね色の焼き目がついたパンを、腕を伸ばして女の子の皿に載せた。

「あっ」

「これに載せて食べるのもっとおいしい。かもしれない」

「……取引にパンは入ってない、です」

「もともと、パンと合わせてひとつの料理なんだ」

「その理由は後付けでは……？」

「事前取引内容を確認しなかったきみが悪い。おとなしくパンも食べるように」

女の子は不満げにぼくを見ていたが、ぼくは気にせずパンを炙る仕事に戻った。

しばらくすると、サクッと耳に心地よくパンをかじる音と「んっ」と驚く声があった。ぼくはにやける顔を抑えるのに苦労した。

食事には二種類ある。ひとりの食事と、ひとりじゃない食事だ。

和やかに会話をするわけではない。それでもほか以外の、料理を冷ますために息を吹きかける音がある。パンをちぎる暖かい音がある。食器同士のぶつかる軽やかな音がある。この寂しい世界で、自分以外の誰かがいる。

小鍋に残ったソースをパンできれいに掬いとる。口に放り込むと、ソースを吸って柔らかくなったパンがほろりと溶けた。ほとんど無味のパンがこのときばかりは甘辛さを纏って舌を楽しませてくれた。

女の子はすでに食べ終わっていた。食器が未使用みたいに綺麗な状態になっている。皿を見つめる顔が名残惜しげに見えるのは、ほかの都合の良い思い込みだろうか。

「足りなかった？」

「……いえ。おいしかったです。ごちそうさまでした」

差し出された食器を受け取って小鍋の上に重ねた。

ぽつ、ぽつ、と、音がしたわけではない。落ちた水滴がそんな風に見えただけだ。それはすぐに間隔を狭めた。月が浮かぶ平坦な水面に、ひっきりなしに丸い波紋が繰り返され始めた。

「強くないうちに入ろう」

ほからは階段前に陣取っていて、そこにも庇はあるけれど、斜めに降りこまれたら濡れ

てしまう。

ほかはバックパックを背負い、木箱を抱えて構内に入った。月明かりもここまでは手の届かない様子である。歩くのをためらう暗闇が寝そべっていた。

と、光が差した。ニトがランタンを手にかけてきてくれていた。

「ありがと。助かる」

「いえ」

ぽくとニトは並んで立って、急に雨脚を強くした夜空を眺めている。月は出ているからすぐに止むような気もしたし、朝まで降り続きそうな気もした。

どちらにせよ、この雨が止むまではニトも戻れないだろう。

「車？」

「いえ、オート三輪です」

「オート三輪って？」

なぜそんなことも知らないのだ、という表情をたっぷりと味わった。

「……荷台付きの、小型三輪自動車です。蒸気自動車ほど運転は難しくないのです。資格を持つていないのは、どっちも同じなんですけど」

「あ、やっぱり蒸気自動車の運転って資格がいるの？」

お前はいつたい何を言っているんだ、という表情で、ニトはぼくからヤカンに視線を移した。運転しているんじゃないのか、と言いたいらしい。

「運転の仕方は教わったけど、資格は持っていないんだ。この世界の人間じゃないからさ」
「異世界人だったんですか」と、ニトが目を丸くした。「……本当に、いたんですね。本の中だけの存在かと思っていました」

「本当にいるんだよ。はじめまして」

ニトはいくらか視線を迷わせた。

「こんな状況で、大変、ですね。少し前なら国賓待遇だったのに」

「それは初耳なんだけど」

「この世界の文明は、迷宮の産出物とそこから召喚される異世界人の知識によって発展してきましたから。どこの国も異世界人から何かしらの恩恵を受けようと必死でした」

「……来るにしても、明らかにタイミングを間違えちゃったな。そもそも来たくはなかったんだけど」

額に手を当てた。期待に応えられる知識なんて持ち合わせてはいないけれど、それでもこうして減んだ世界でホームレス生活をするよりは、国賓としてふんぞり返っていたかった。

「まあ、いいや。どうにもならないし。帰る方法って知ってる？」

「……かつては、召喚された迷宮の魔力変動期に合わせて帰還するとされていましたが、今は世界中が魔力飽和状態なので、魔力変動も起きません。それに迷宮はすべて資源が枯渇し、封鎖されたと聞きます。むしろ、あなたはどうかやってここに？」

ぼんやりと記憶にあるのは、朽ちた石造りの遺跡だった。

一泊二日を予定したキャンプに向かう途中、マンホールに落ちたような浮遊感にあつて、気づけばそこに立っていた。

「さっぱり分からない。事情が分かりそうな人は知ってるけど、そっちはどこにいるのが分からない」

「そう、ですか」

ニトの視線に氣遣うような優しさがあつた。良い子なんだろうな、と考える。

「きみも旅を？」

「……はい。初めての、旅、です」

含みのある言い方だった。そこを深く訊いて良いものか、悩んだ。

踏み込むには、ぼくらの間にはまだ深い溝があつた。人はおらずおらずと出会うものだ。そこから急に距離を詰めるのは、どうにも品がないように思えた。

「そっか。お互いに大変だ」
「はい」

ざあ、ざあ、と雨が降っている。

広がる一面の水の平原に、絶え間なく波が生まれている。流れてきた厚い雲に、月の明かりがゆっくりと遮られた。

「実は」とニトが言った。「オート三輪が、故障してしまっただけです。ずいぶん動かしてなかったから」

「奇遇だね。ぼくの車も壊れてるんだ。前から調子が悪くて」

「えっ」

ニトが髪を揺らしてぼくを振り仰いだ。

ぼくはその表情を見返した。

お互いに見つめあって、どうしてか気まずい沈黙が横切った。

「そう、なんです」

「困ったよね。こういうとき、どうしたらいいんだろ」

「普通はリポイル・トラクションに頼るんですけど。こんな状況ですから……」

聞き馴染みのない言葉に首をかしげると、ニトが「あつ」と気づいて説明してくれた。

「移動式の蒸気修理車のことです。街道を何台も周回していて、故障車を見つけるとその場で修理してくれたり、蒸気工場まで牽引してくれるんです」

「それは便利だ」

まさに今、助けてほしい。

月が隠れてしまって、山にも平原の先にも家の灯りひとつすらない。かつてはこの駅を利用する人がいて、平原を走る車のヘッドライトがあつて、虫や鳥の鳴き声が聞こえたのだらうか。

城跡に立って昔に想いを馳せるような気持ちだったが、馴染みのない世界の、見たことのない過去を想像するのは難しかった。感傷的な気持ちよりも、明日、どうすべきかという問題が差し迫っていた。

「そろそろ、戻ります」ニトはぼくに向けて頭をさげた。「夕飯、ごちそうさまでした」

「雨だけど。もう少し待ったら？」

「いえ、すぐそこなので。夜も遅いですし」

門限の迫ったお姫さまのように言って、靴を持ち上げ、雨の中に階段を降りていく。夜闇に消えていく背中を見送った。水をかき分ける音は、やがて雨音にまぎれて聞こえなくなる。

そのまま、しばらく立っていた。ひとりになると、目の前の夜ですら陰気に見えてくる。「あつ」

雷が落ちるように気づいた。

さっきの、もしかして、助けを求められたのではないだろうか。車が動かないことで困っているのは、ほくだけではないのだ。

「なにが奇遇だね、だよ」

実際、ぼくも状況は同じなので、助けようもないのだけれど。もう少し言い方はあったはずだ。

ニトが去った方を見やるが、今さら追いかけるわけにもいかなかった。

大きくため息をついて、ぼくは構内に戻った。

今日はもう、寝よう。

4

テントから出ると、白紙のような朝日が差し込んでいた。

寝ぼけ眼で階段に腰を下ろし、ぼけっと景色を眺めた。夏空によく見るような大きな入

道雲が山から湧き上がっていた。目の前の澄んだ水たまりが今ばかりは海に思える。

かがんで両手を差しこみ、掬い上げた水で顔を洗った。水はひんやりと心地よかった。

三回も繰り返せば目が覚める。シャツの裾で顔を拭い、そのまま後ろに倒れこんだ。

青い陰の張り付いた構内の天井が見えた。細長い蛍光灯のようなものが吊り下がっている。背中のタイルがほんのりと暖かく、このまま寝てしまいたいようなほど心地がよい。

目を閉じて両手を広げて転がっていると、ざぶざぶという音が聞こえた。それはやがて、べたべたに変わって、すぐ近くで止まった。ふわりと柔らかな風と、初夏の香りがした。

「なにをやってるんですか?」

幼い響きを語尾に残した、すこし高い声。

「太陽を感じているんだ」

「それは、異世界の儀式かなにかです?」

「いや、趣味」

「……そうですか。楽しそうですね」

目をあげると、膝を抱えてしゃがんだニトがぼくの顔を見下ろしていた。

「おはよう」

「はい。おはようございます」

「朝ご飯が欲しいの？　ちょっと待ってね」

「違います」ニトは頬を赤くした。「そんなに食に卑しくありません」

卑しくありません！

そんな表現をじつさいに使う人には初めて出会った。真偽はさておき。

「じゃあ、どうしたの？」

「……あなたの車なら、信号拳銃が載っているんじゃないかと思って」

「トランクに入った小さい銃ならあるけど」

「それです。わたしのオート三輪にはないんです」

「銃でどうするの？」

「助けを呼びます」

「詳しく聞こう」

ほくは勢いをつけて上半身を起こした。ニトが驚いたように身体を引いた。

「……故障したり、燃料や水不足で立ち往生したときには、信号弾で赤い煙を空に打ち上げるんです。それを見た移動式蒸気修理車が駆けつけてくれるんだとか」

「へえ。そんな文化があるのか」

「わたしも本で読んだことがあるだけなんです……」

人がほとんどいなくなったこの世界で、まだ移動式蒸気修理車とかいうのを運転している変わり者がいるのかは分からない。それでもここで日向ぼっこをしているよりは有意義そうだった。

「さつそく試してみよう」

ほくが立ち上がると、ニトも倣った。

ズボンの裾をまくり、階段を降りて、水の中に足を沈める。顔を洗うには心地よかったけれど、両足をつけるには少し冷たさが過ぎる。

ぎぶぎぶと水を分けてヤカンに向かう。ニトも後ろを付いてきた。昨日の雨のせいだろう。いくら水が増したようで、昨日よりも歩きづらい。

助手席から小型トランクを取って、ボンネットの上に置き、銃を開いた。

上下二連の小型の銃が、赤い布張りの型にぴったりと納まっている。上蓋には六発分の弾を収納できるように型があいているが、今は頭の赤い銃弾が二つ並んでいるだけだった。

「これだよね？」

横に並ぶニトに訊く。

「はい。赤い弾頭が信号弾です」

弾は装填したが、まだ一度も撃つたことがないので、それを知ったのは初めてだった。

なんでこの二つだけが赤いのかずっと疑問だったのだ。

信号拳銃をトランクから取り出すとずっしりとした重みがある。小さくても銃身はすべて金属だ。銃把に合わせて握ると、ちょうど親指のあたりに小さなレバーがある。押し込みながら左手で銃身を下げると、手元近くで折れるように曲がって、装填してある銃弾の尻が飛び出した。

二発のそれをつまみ出して、トランクの型に押し込んだ。代わりに赤い銃弾を二つ装填して、銃身を戻す。

撃鉄を親指で押し下げると、手元でがちりと噛み合う音がした。あとは引き金を引くだけで良いはずだった。

ニトの顔をうかがうと、どこか緊張した表情がぼくを見つめていた。止める様子もないので、ぼくは腕を上には伸ばした。耳に二の腕をぴったりと付け、反対の耳は手のひらで押さえる。引き金に人差し指をかけた。

ニトが慌てて両手で耳を覆ったのをたしかめて、ぼくは指を引いた。ところが引き金は半ばで、がちりと固い感触に止まってしまった。

なんだ、とさらに強く引くと、途端に軽くなって、次の瞬間には音と衝撃が手首に響いた。

ニトが両耳に手を当てたまま、小さく口をあけて見上げていた。

頭上に真っ赤な煙が高く伸びていた。縦に尾を引いた飛行機雲のように、まっすぐに。ちゃんと撃てたらしい。手の中の信号拳銃を見る。

「……どうしました?」

「引き金を引いたとき、途中で指が止まったんだ。急に重くなって」

「それは安全装置です」

「安全装置?」

そういえば、映画でそんな言葉を聞いたことがあった。でもそれって、レバーとかボタンじゃなかったわけ。

「誤射を防ぐために、引き金の途中で止まるようになってるんです。そこでもう一度、今度は強く引いて、ようやく撃てるそうです」

「なるほど。よく知ってるね」

「本で読みました」

「博識だ」

「いえ。知っていることしか知らないです」

哲学者みたいなことを言うニトの顔は、べつに冗談を言っているようでもなかった。

しかし、そうか、安全装置なんてものがあつたのか。

ぼくは手の中の銃を見る。その重みは、何度持っても変わらない。良い勉強になった。

「……なにかありました？」

「いや、なんでもない」銃をトランクに戻して、蓋を閉じて錠をかけた。「これで誰か来てくれるといいね」

「そう、ですね。でないと、困ってしまいます」

二人して空を見る。赤い筋は高く伸びていて、その先の方は随分と細い。風に流され、輪郭は少しぼやけている。これをどこかで見てくれる人が、まだいるのだろうか。

しばらくそうしていたけれど、ぐう、と間の抜けた音に視線を戻した。

「……………」

ニトがうつむきがちにお腹を両手で押さえている。

「今日も鳥は元氣そうだ」

「……よく言って聞かせておきます」

「さ、朝ご飯にしよう。食べていくでしょ？ ま、缶詰なんだけど」

駅に戻ろう、と水の中を歩き出す。背中越しにニトの歩く音を聞く。

「……あとで、缶詰をお支払いします」

そんなつぶやきに、ぼくは思わず吹き出した。

5

スベアの火で温めただけの簡素な朝食をとって、ぼくらは階段に腰をおろして待っていた。

腕時計を見て、過ぎた時間をたしかめる。赤い煙はもうすっかりと流れて消えてしまった。誰かが来る様子はいまだにない。

ぼくもニトも口にはださない。予想はついていたからだ。最初から、一度で、誰か来るとは思ってもいない。

「もう一回、撃ってみよう」

立ち上がると、ニトはぼくを見上げて眉を寄せた。

「今ですか？ もう少し時間を置いた方がいいのでは」

「時間を置いても仕方ないよ。いつ撃つのが正解かなんて分かりっこないんだし」ズボンの裾をまくる。

「で、ですけど、あと一発しかないんですから、慎重に」

「慎重にどうするの？ 待つ？」

「うっ」

ニトはもごもと言葉を迷わせてから、ぶくつと頬をふくらませた。

「……そんなに撃ちたいなら、撃てばいいですよ。知りませんか」

「こう考えてよ。いま撃っておけば、いつ撃とうかという悩みからは解放される。だめなら次を考えよう」

「能天気すぎます……頭がただの空洞だと思えませんか……」

「きみ、意外と辛辣だね」

その豊かな表現力ははくをけなす以外の方向で役立ててほしい。

朝よりもぬるくなった水の中に足を入れ、ヤカンに向かった。ボンネットの上にはトラंकが置きっ放しだ。最初から二発、撃つつもりだった。

リボイルだかトラクシオンだか知らないが、どうせ来やしないのは分かっている。ただでさえ人は減って、法を執り締まる人も消えて、職場も学校も崩壊したような世界で、いまだにそんな仕事を熱心に行っている人間なんているわけがない。

銃をあけて、信号拳銃を取り出し、握る。空に向けて、引き金を引く。

一回。安全装置で半ばで止まる。力をこめる。

二回。反動と発砲音。

見上げれば問題なく赤い煙が伸びていた。二度目の手順はうまくいった。奇しくも良い練習になった。

レバーを押して銃を折ると、空になった薬莢が残っている。取り出してトラंकの上蓋の弾型に押し込んで、最初に入っていた二発を装填し直した。銃を納めて銃をおろし、また助手席に置いた。

階段まで戻ってくると、ニトが膝を抱えるようにしゃがんでいる。頬はぶくりとふくらんだままだ。

「機嫌、直してよ」

「……べつに悪くないです。銃はあなたのものなので、いつ撃つても自由です」

「知らないのかもしれないから言っておくと、今のきみの状態を機嫌が悪いつて言うらしいよ」

「そうですか。初耳です。覚えておきます」

ツンとした言い方に思わず苦笑を浮かべてしまう。

「大丈夫だよ。すぐに来るってば」

と、言っているが、ぼくはそう思っていないのだから、ずいぶんと白々しい響きに

なつてしまった。

まあ、そうだな、とりあえずヤカンからすっかり荷物をおろして、ゆつくり寝転んで今後を考えよう——と。

「……これ」

はつと顔をあげたニトが目を見開いた。立ち上がった階段の際に駆け寄った。

突然どうしたんだよ、とは言えなかった。ニトが聞きつけた金属が擦れ合う音はほくにも聞こえていた。

蒸気によって動かされたピストンの、巨大な機関車の走るような力強い排気音。すべてが遠く霞んでいて、けれどたしかに、ここまで届いていた。

ニトが驚いたようにほくを振り返った。平原の一方を指差して、明るい声で言った。

「黄色い煙です！ 移動式蒸気修理車です！」

そこにはたしかに鮮やかな煙が筋を伸ばしていた。やがて白い砂丘から浮かび上がるように、黒い点が現れた。それは間違いなくこちらに向かって近づいていた。

「……まじで？」

滅びたこんな世界で客がいるはずもないのに、真面目に仕事をしている人間がいるということが、ぼくにはさっぱり理解できない。それでも間違いなく、黄色い煙をもうもうと

噴き上げながら、その車はこちらに向かっていった。

6

ヤカンのボンネットを開き、覗いて。ヤカンのバック・ドアを開いて、覗いて。真っ黒に焼けた肌に髭面のおじさんは「ここじゃ無理だな」と言った。

「ボイラーからの配管の継ぎ目が溶けて割れてやがる。運転に慣れてねえやつが高温で焚き過ぎた結果だ。こつから蒸気が漏れたせいで燃料管も三本、使い物にならねえ」

「……はあ」

「燃料室の方も怪しいし、クランクもガタがきてる。チェーンにいたっちゃ丸ごと交換だな」

「……はあ」

おじさんの鋭い視線にぼくは背筋を正した。べらぼうに迫力があつた。

「お前の車だろうが。しっかり聞いとけ」

「は、はいっ」

「こいつは工場に引つ張る。バラさなきゃどうにもならん」

「……お願いします」

あ、それは結構です。とはもちろん言えなかった。いや、言うつもりもないのだけれど。有無を言わせない言い方というか。

「それで、もう一台あるんだったか？」

今度は二トを見据えた。べつに怒っているわけではないのだろう。それでもおじさんの目つきはなかなか鋭い。

二トはびくっと肩を跳ねさせると、小動物のような俊敏さで多くの背後に回り込んだ。ぼくを盾にするなよ。

おじさんは、代わりにお前が教えるとはかりにぼくを睨んだ。仕方なく、駅の横手を指差した。

「そうか」

と、工具箱を片手に荒っぽく水を蹴飛ばしながら歩いて行った。

「ほら、もう行っちゃったよ」

後ろの二トに声をかける。

「……どうも」

不本意そうな低い声が返ってきた。

「怖かった？」

「いいえ！」

二トはおじさんの跡を追うように歩き出す。意識して伸ばしているらしい背中が微笑ましい。ぼくもその後ろに続く。

ヤカンの横に並んだ大きなトラックを横目に眺める。これが移動式蒸気修理車というものらしい。

とにかく、でかい。

横幅だけでヤカンを三台並べたくらいはあるだろうか。車体には丸められた金属の管や予備のタイヤなんかが固定されていて、後部の荷台の上には錆の浮かんだ黄色いクレーンと滑車が飛び出ている。修理車というより工事車両と言われた方がしっくりくるような迫力がある。

駅の横手を曲がると、そこにも小さな階段と通入口があった。二トがオート三輪と呼んでいた小さな車が停まっていた。文字通りの三輪で、ずいぶん丸っこい。人が座れるのは運転席と助手席だけで、後ろは荷台になっていた。いまは幌が斜めに張ってある。タイヤも小さいもので、見た目も軽トラックみたいにシンプルだ。

おじさんは開いたボンネットに顔を突っ込んでいたが、ぼくらの歩く水音に気づくと顔

を上げた。ニトがまた、すすつとぼくの後ろに回り込んだ。
 「おい、ろくにメンテナンスもしねえで動かししろ。古い魔鉱石の燃え滓が焼き付いてやる」

おじさんはボンネットをばたと閉めた。工具箱に道具を戻して持ち上げる。

「こっちも工場まで運ぶしかねえな」

それだけ言うと、おじさんはぼくらの横を通ってさっさと戻ってしまった。

「工場まで運ぶしかないってさ」

「……聞こえてましたけど?」

「ならいいんだ」

背中に隠れたニトから睨まれつつ、取って返すようにヤカンに戻った。

それからもおじさんはテキパキと動いていて、ぼくらは見てることしかできなかった。やったことと言えば、駅の構内に持ち込んだキャンプ道具をヤカンに積み直したくらいだろう。

おじさんは修理車から引いたワイヤーフックをヤカンの車体の下に取り付けた。修理車の運転席へはしごを使って乗り込むと、ドアを閉める前にぼくらを見た。

「なにをばうつとしてんだ。早くそれに乗れ。出るぞ」

ぼくは言われた通りにヤカンの運転席に乗り込んで、助手席の荷物を後ろに片付ける。

ニトはぼつんと立ったままである。

ぶおん、とけたたましい蒸気音が修理車から響いて、白い蒸気が噴き上がった。

「早く乗って」

窓から顔を出して言う。ニトはぴんと背筋を伸ばして寄ってきて、幾度か手を迷わせてから助手席のドアを開けた。

「……あの、お邪魔して、いいですか」

「もちろん。ほら、置いてかれちゃうよ」

修理車はマンモスみたいにゆっくりと動き出した。ニトが慌てて助手席にお尻を滑り込ませた。

「あ、わっ」

ワイヤーがぴんと張って、ヤカンがぐんと進み始める。

ニトが両手でドアを引いて閉めた。ぼくはハンドルを握り、方向だけを調整する。

おじさんの修理車はゆっくりとした速度で駅の横手に回って、ニトのオート三輪に横付けするように止まった。

どうするのかと二人で首を伸ばして見ていると、おじさんは修理車の荷台上がって、

台座から突き出たレバーに手をかけた。荷台のアームが蒸気を噴かしながら動き出した。それはまるで、ゲームセンターのクレイジーゲームみだった。

アームをオート三輪の真上に動かすと、おじさんは荷台から降りて、アームから引き伸ばしたケーブルをオート三輪の四方に取り付けた。あつという間の手際だった。そうしてまた荷台に登りレバーを動かすと、オート三輪は軽々と持ち上がった。

「すごいなあ」

「……あれ、落ちないですか。不安です」

「大丈夫だよ。たぶん」

「たぶん？ たぶんって言いましたよね？ たぶん？」

ニトははらはらと落ち着かない様子で、宙に浮いたオート三輪を見守っていた。

心配とは裏腹に、オート三輪はちつともふらつく様子もないままに、修理車の荷台にぴたりと積載される。おじさんはオート三輪を金具で固定すると、滑るように運転席に戻った。

ぼくはハンドルを握っていたけれど、街道に出るために曲がったときに調子を合わせただけで、あとはまっすぐで平坦な道になった。

ニトは助手席の窓ガラスに鼻を寄せて、ぐんぐんと遠くなる駅を見つめていた。

白い雲を浮かべる水上に駅舎がひっそりと佇んでいる。ぼくらが通ったあとに生まれた波紋も、駅までは届かずに消えていく。離れて見ればなんとも幻想的な景色だった。

「絵、描きたいな」

ぼそりと呟く声は独り言のようで、染み入るような響きがあった。初めて出会った駅のホームで、一心に絵を描いていたニトの横顔が思い出された。

引つ張られるだけのぼくらは止まることもできず、水上の駅はやがて蜃気楼のように遠くぼやけていった。完全に見えなくなったころ、ニトは窓から顔を離してシートに背を預けた。

整った容貌はつんと澄ました顔をしているが、わずかに下がった眉尻が心残りを語っていた。

「車が直ったら、また来たらいいんじゃない？」

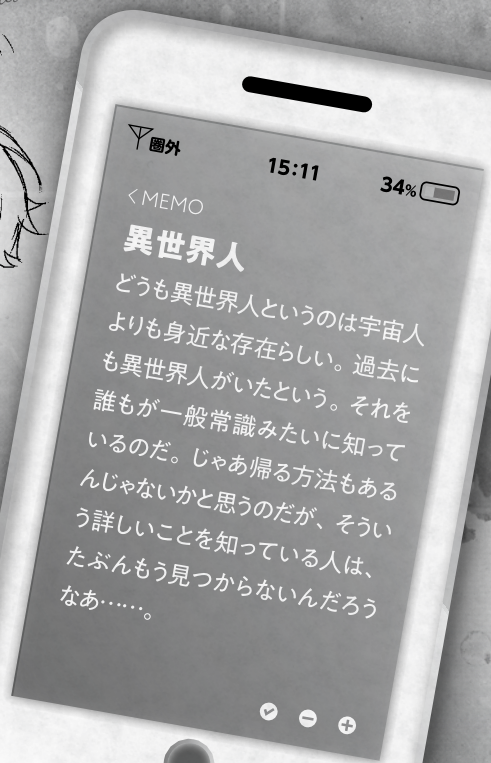
ニトは「そうですね」と答えたが、それが言葉通りの意味でないことは分かった。説明しても理解してもらえないだろうとか、細部を言葉にするのが面倒くさいとか、話がややくこしくなるとか。そういうときによく使う「そうですね」だった。

これは決して賛同の意味でも、了承の意味でもない。日本人らしい奥ゆかしい言葉なのである。現代っ子か。

前を走る修理車が唸りをあげた。車体の下から大量の蒸気が噴き出した。それは濃密な霧となつてぼくらを包んだ。視界は真っ白になって、何も見えなくなった。どこに行くのかも、これからどうなるのかも、さっぱり分からないでいた。



See you later, Fantasy
World. We hope that
Tomorrow comes again.



It's time to say
goodbye, but I think
goodbyes are sad and
I'd much rather say hello.
Hello to a new adventure.

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！

©Kazamitori, Nimoshi 2020